

シジウィック『政治学要論』とJ. N. ケインズ

経済学部 講師 中井大介

はじめに

本学に赴任して間もない昨年5月、私は興味深い一冊に出会った。ヘンリー・シジウィック著『政治学要論』(*The Elements of Politics*, 1891年)である。同著は100年以上前の貴重な文献ではあるが、実を言うと特別珍しい文献ではない。日本国内でもいくつかの大学図書館に所蔵されており、私自身も大学院生時代にイギリスの古書店より購入していたからである。しかし本学図書館で私が手にしたのは、それらのものとは異なる一冊であった。

第一の特徴は、私の所蔵するものと比べて装丁が異なることである。臙脂色の表紙といふ見た目はさほど変わらないが、よく見ると表紙のデザインや素材が異なっており、より高級感のある仕様となっている。つまりこれは、一般に販売される通常版とは別に、著者シジウィックが親しい人たちに寄贈するために用意した、特別な著者献呈本なのである。(写真1)

しかしさらに興味深いのは、冒頭のページ上部に次のような一筆が添えられていることである。(写真2)

14 August 1891 J. N. Keynes from the Author
1891年8月14日 J. N. ケインズ 著者より

すなわち本学所蔵の『政治学要論』は、著者シジウィックからJ. N. ケインズへと寄贈された一冊に他ならないのである。シジウィックを中心に思想史研究を進めてきた私にとって、彼自身の手によって寄贈された一冊との感慨深い出会であったが、これは何よりも私の研究上の関心を惹く出会いであった。ここでは、

ケインズの日記を手掛かりに、『政治学要論』をめぐる両者の関係を辿ることにしたい。

シジウィックと J. N. ケインズ

シジウィック (Henry Sidgwick, 1838-1900) は、19世紀後半のイギリスを代表する哲学者であり、『倫理学の諸方法』(*The Methods of Ethics*, 1874年)の著者として名高い人物である。そこでの彼の結論は、個人は利己心と博愛心とを併せ持っており、個人の内面において利己心と博愛心を完全に統合することは不可能であるというものである。これは、人間の理性・判断における不合理性を積極的に認めた「実践理性の二元性」(Dualism of Practical Reason)と呼ばれ、物議を醸し出すことになった。同時に彼は、アダム・スミス以来の経済学をサイエンス(理論)とアート(実践)に区別して展開した『経済学原理』(*The Principles of Political Economy*, 1883年)、望ましい政府の役割と構造について体系的に論じた『政治学要論』などの社会科学の書物も著わしており、幅広い学問分野に通暁した思想家であった。シジウィックはこれら著作を通じて、功利主義(最大多数の最大幸福)を軸にした実践的な学問体系を築き上げようとしたのである。

他方、J. N. ケインズとはいかなる人物であろうか。ケインズという名前を聞いて、経済学者ジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946)を想起される読者も多いことだろう。今日でも財政出動によって不況を乗り切ろうとする方針はケインズ政策と呼ばれているが、このジョン・メイナード・ケインズの父親こそ、ジョン・ネヴ

イル・ケインズ (John Neville Keynes, 1852-1949) である。シジウィックや息子メイナードほど有名ではないが、『論理学』(Studies and exercises in Formal Logic: 1884年) や『経済学の領域と方法』(The Scope and Method of Political Economy: 1891年) などの著作によって名を馳せた人物である。

二人はケンブリッジ大学を舞台に活躍した同僚であった。シジウィックは1855年に17歳でケンブリッジに入学し、若い頃から才能を開花させ、1883年からは道徳哲学教授を務めた。他方シジウィックの講義を受講することもあった14歳年下のJ. N. ケインズは、1884年からは道徳哲学講師として活躍し、教授にこそ就任してはいないが、シジウィックとともに大学改革に貢献し、事務方の要職を占めた人物である。ケインズはシジウィックを常に敬慕しており、その日記には次のような記述が多数見受けられる。

A very pleasant dinner party at Mrs. Sidgwick's. I always find a talk with Sidgwick intellectually very braving; & I go back to my work after it with renewed energy.

シジウィック夫人のところで非常に楽しい夕食会があった。シジウィックとの会話はいつも知的な刺激に満ちている。そこで私はエネルギーを回復してから仕事に戻るのである。(1877年3月4日)

At last Sidgwick is in his proper place, having been elected to the Knightbridge Professor.

ついにシジウィックは、彼にふさわしい地位に就くことになった。ナイトブリッジ教授に選出された。(1883年11月3日)

ところでこのケインズの日記 (*The Diaries of John Neville Keynes*: ケンブリッジ大学保管の原本をマイクロフィルムに写したものが本学に所蔵されている)、ヴィクトリア後期の文化・風習を伝える資料としても、あるいは将来の大経済学者メイナードの成長記録としても大変興味深い。例えばメイナードが誕生して間

もない1883年7月の日記には、何とも微笑ましい父親の心境が綴られている。(写真3)

My two pets to Bedford. I did not like parting from them even for a very short time. We don't think it possible that we could love any other baby as we do our little Maynard. He looks so sweet and so pathetic when he begins to cry. I would I could photograph his looks upon my memory. I fear to forget them. His intelligence is increasing, & this enables him to be more patient when his Mother is getting ready to nurse him. He at least half understands what is going on.

私の二人のペット [妻フローレンスと子メイナード] はベッドフォードへ帰ってしまった。私は一時たりとも二人から離れたくはなかった。他のどのような赤ちゃんだろうと、私たちの小さなメイナードほどに愛することができるとは思えない。彼は本当に可愛らしく、もし泣き始めようものなら胸が痛む。彼の姿を写真にして私の記憶に取って置けたら良いのに。彼の姿を忘れてしまわないか心配で仕方がない。彼の知能はどんどん発達しており、母親がミルクの準備をしようものなら [それを察して] 辛抱強くなっている。彼は行われていることの半分以上を理解している様子だ。(1883年7月27日)

父ネヴィルはメイナードを特別可愛がっており、1883年以降の日記には、毎日のようにメイナードが登場する。中にはメイナードが子供のころから貨幣にまつわる経済問題に関心を抱いていたエピソードなども存在する。

話を元に戻すが、J. N. ケインズはシジウィックを人物と学識の両面で敬っていたことは間違いない。また二人はケンブリッジ大学の改革を共に牽引し、互いに信頼し合う仲であった。しかしながら経済学の位置づけという問題をめぐっては、両者の見解に重大な隔た

りがあると私は推察している。そこでもしケインズの所有していた『政治学要論』に何らかの書き込みが残されていれば、この点を明確に立証できるかもしれないと私は期待したのである。しかしそうした形跡は認められず、むしろ非常に良好な本の状態からして、ケインズはほとんど目を通してさえいないのではないかと感じさせるものであった。

経済学の位置づけとマーシャル

ここでキーパーソンとなるのが、『経済学原理』(*Principles of Economics*: 1890)の著者であり、需給分析などによって経済理論の発展に大きく貢献したアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) である。当初シジウィックとマーシャルは親密な間柄にあったが、次第に経済学の位置づけをめぐる激しく対立するようになる。

元来経済学は、倫理や政治の問題と直接関連する哲学的問題の一つとして扱われてきた。19世紀ころまで経済学の英語表記は、*economics*ではなく*political economy* (政治経済)が一般的であったのもそのためである。しかし19世紀後半以降、理論化・数学化が進められる中で経済学は次第に独立した学問分野としての地位を確立していくことになる。こうした動きの旗手がマーシャルであったのに対して、経済学を哲学的問題から切り離して純粋科学であるかのように扱うことに警鐘を鳴らしたのがシジウィックであった。そして両者は、大学教育における経済学の位置づけをめぐる激しい対立を繰り広げるのである。従来通り経済学を身に付けるためには哲学や歴史にも精通していなくてはならないとして譲らなかつたシジウィックに対して、専門の経済学者を教育する必要性をマーシャルは唱えたのである。そうした両者の様子をケインズは次のように述べている。

I trust the present friction between Sidgwick & Marshall will wear off.

シジウィックとマーシャルの間に生じて

いる摩擦は消え去るものだと私は信じている。(1885年3月4日)

The state of things between him & Sidgwick is really becoming very painful.

彼 [マーシャル] とシジウィックの間柄は、本当につらい状態になりつつある。

(1885年4月19日)

しかしこれは摩擦どころではなく、経済学の位置づけという学問的な信条に根差す問題であり、シジウィックとマーシャルの人間関係まで破壊してしまうことになるのである。シジウィックともマーシャルとも親交の深かつたケインズは、こうした激しい対立に直面して中立的な立場を保っていた。その理由は、「利己的すぎる」マーシャルよりも心情的にはシジウィックを支持したいと考える半面、本質的な争点に関してはむしろマーシャル寄りの考えを彼が抱いていたからではないかと私は推察している。

ケインズはシジウィックの『経済学原理』(1883)に深く関わっており、哲学的問題から経済学を切り離して考えるべきではないというシジウィックの経済学観を誰よりも理解していたはずである。しかし、その8年後に出版した『経済学の領域と方法』(奇しくもシジウィック『政治学要論』と同年の1891年の出版である)において、ケインズはそうしたシジウィックの経済学観を実質的に否定し、哲学的問題から分解したうえで科学として経済学を位置づけるべきだと説いているのである。そしてケインズが同著の執筆を進める上で助言を求めたのはシジウィックではなくマーシャルだったのであり、ケインズはシジウィックよりもはるかにマーシャルと経済学観を共有するようになっていたのである。したがって哲学的題材が存分に盛り込まれ、経済学とも入り交じった内容をもつシジウィックの『政治学要論』にケインズが関心を示さなかつたとしても不思議ではなく、もっともにさえ思われるのである。

おわりに

シジウィック亡き後、ようやくマーシャルは長年の念願を果たし、経済学を独立した学科に据えることに成功する。しかしそれはマーシャルだけでなく、J. N. ケインズも最終的に望んでいた帰着であったように思われる。その後、経済学はますます理論化・数学化を加速させ、独立した科学としての道を歩みながら現在に至るのである。しかしそうした中、経済学は精緻な分析ツールを獲得していく一方で、手放すことになったものも多かったように思われる。そして第一次世界大戦や世界恐慌の経験などを通じて、シジウィックと同じような危惧を抱き、文明社会の進むべき道に照らしながら経済学の方向性に警鐘を鳴らしたのが、ネヴィルの息子メイナードであったのではなかろうか。

経済学者と政治哲学者の思想は、それが正しかろうと間違っていようと、実に強力なものである。事実、世界はこの思想によって支配されているのである。いかなる知的影響とも無縁であると信じ込んでいる実際家も、過去の経済学者の奴隷であるのが常である。権力の座にあって天声を仰ぐ狂人も、数年前の三流学者から狂気を引き出しているのである。既得権益の力は思想の浸透力に比べて誇張されていると私は思う。もちろん思想の浸透には時間がかかる。なぜなら経済哲学と政治哲学の分野で、25歳から30歳以降に新しい理論の影響を受ける人は少なく、それゆえ官僚や政治家や煽動家さえも、おそらく現在の事態に適用できる最新の思想を持ち合わせてはいないからである。しかし、いずれにせよ善悪にとって危険なのは既得権益ではなくて思想である。
(ジョン・メイナード・ケインズ『一般理論』1936年)



写真1. 筆者所蔵(左)と本学図書館所蔵(右)の『政治学要論』

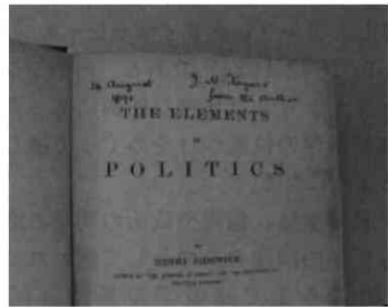


写真2. J. N. ケインズによる署名

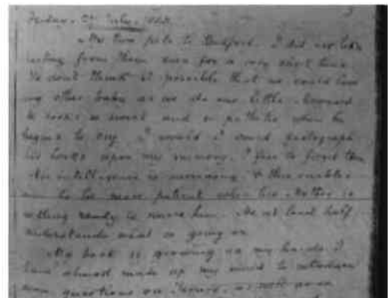


写真3. 1883年7月27日のJ. N. ケインズの日記